

積の病が形成されるので、我々は、大・小承氣湯を用いて食積を攻下する。食が去れば熱邪も寄る辺を失って、熱は解除されるのである。また、もし熱邪と体内の「血」が結合すれば、蓄血証が形成されるので、我々は桃仁承氣湯を用いて瘀血を除去する。その結果として解熱するのである。

このようなわけで、体内に常態を失った「水」、「血」、「痰」、「食」がなくなりさえすれば、病邪もまた結合する寄る辺がなくなるので、病は形成されなくなるのである。第17条はそれ以外に、弁証施治は臨機応変に、しかも敢しく行い、診断治療にはまずその源を究め、その後で治療すべきであることも示唆している。

本篇の条文は多くはないが、述べていることはすべてかなり原則的な指示である。予防、病因、四診、病機の論議、治療順序の分析、審証求因など、各方面にわたり、すべて具体的な例を挙げて説明しており、この原則を十分に理解すれば、自在に応用することができる。同時に、本篇の内容は以下の各篇を学習するための非常に大きな啓示となっている。

第二 瘧・湿・喝病の脈・証

本篇は「瘧」「湿」「喝」の三種の病について述べており、『傷寒論』の中にも類似の条文があるが、やや簡略である。『金匱要略』に処方がある『傷寒論』には処方がない場合があるし、記されている場合もすべてが同じというわけではない。

瘧病——剛瘧・柔瘧

【原文】（二—一）

太陽病、発熱無汗、反惡寒者、名曰剛瘧（瘧、又作瘧）。

【訓読】

太陽病、発熱汗なく、反つて惡寒する者は、名づけて剛瘧（瘧はまた瘧しに作る）という。

【原文】(二一二)

太陽病、發熱汗出、而不惡寒、名曰柔瘧。

【訓読】

太陽病、發熱汗出でて、惡寒せざるは、名づけて柔瘧という。

【解説】

以上の兩条は、瘧病には剛、柔二種の別があることを述べている。「太陽病」とは、頭痛、發熱、惡寒などの病証を包括したものを指している。發汗の有無と、惡寒の有無によって分けられ、汗が出ないで惡寒のあるものは表実有寒であって「剛瘧」と称する。汗が出て惡寒のないものは表虚無寒であって「柔瘧」と称する。

難治の瘧病(1)

【原文】(二一三)

太陽病、發熱、脈沈而細者、名曰瘧、為難治。

【訓読】

太陽病、發熱し、脈沈にして細の者は、名づけて瘧といい、難治と為す。

【解説】

太陽病で發熱すれば、浮脈が見られるはずである。もし瘧病であっても、緊弦のような脈象が見られるはずである。ところが沈細の脈象が現われるのは、病人の気が少なく、陰が不足した状態を物語っている。気虚で陰虚の人がさらに瘧病となれば予後は不良である。ゆえに「難治」というのである。

誤治による瘧病

【原文】(二一四)

太陽病、發汗太多、因致瘧。

【訓読】

太陽病、發汗すること太だ多ければ、因って瘧を致す。

【原文】(二一五)

夫風病、下之則瘳。復発汗必拘急。

【訓読】

夫れ風病は、これを下せば則ち瘳す。復た発汗すれば、必ず拘急す。

【原文】(二一六)

瘡家雖身疼痛、不可発汗、汗出則瘳。

【訓読】

瘡家は身疼痛すと雖も、汗を發すべからず、汗出ずれば則ち瘳す。

【解説】

上記の三条は誤治によって起された瘳病について述べている。

第一は、太陽表病で、発汗しすぎて津液が失われ、そのために筋が養分を失って瘳病を起したものである。

第二は、元来は太陽中風で、風邪は当然解表によって発散すべきものである。ところがもし誤って

瀉下法を用いると、そのために津液が傷められ、項背強急の瘳病を起すのである。もしさらに誤って発汗させれば、津液はさらに傷められ、筋脈は滋養されなくなって、四肢も拘急するようになるのである。

第三は、もともと瘡瘍(訳註…できもの)を患っていた人の場合で、このような病人は長期間にわたって膿血が流出しているので、津液はすでに不足している。それゆえ身体疼痛のような表証があっても、発汗法を用いるべきではない。もし発汗させれば、津液はさらに失われ、瘳病が発生する。

以上の三者をまとめていえば、すべて治療の誤りから瘳病を引き起こしたものであり、その主要原因は「津液の傷亡」以外の何物でもない。

瘳病の証象と変化

【原文】(二一七)

病者身熱足寒、頸項強急、惡寒、時頭熱、面赤目赤、独頭動揺、卒口噤、背反張者、瘳病也。若発其汗者、寒湿相得、其表益虚、即惡寒甚。発其汗已、其脈如蛇。

【訓読】

病者、身熱し足寒く、頸項強急し、惡寒し、時に頭熱し、面赤く目赤く、独り頭動揺し、卒に口噤

し、背反張する者は、瘧病なり。若しその汗を発する者は、寒湿相得て、その表益々虚し、即ち悪寒甚だし。その汗を発し已^かつて、その脈蛇の如し。

【原文】 (二一八)

暴腹脹大者、為欲解。脈如故、反伏弦者瘧。

【訓読】

暴^{にわか}に腹張り大なる者は、解せんと欲すと為す。脈故の如く、反って伏弦なる者は瘧す。

【解説】

上記の二条は瘧病の証象と変化について述べている。剛瘧と柔瘧の弁別については前に述べた。瘧病の証象は第7条で述べているように、発熱、悪寒、頸項背部の強直による反り返りであり、頭部の発熱や顔面と眼の発赤は常に出現し、ときには牙関緊急、開口不能、頭部動揺、両足寒冷などの症状もあれば、これは間違いなく瘧病である。

このような症状が出現するのは、瘧病は完全には表証を離れることはないからである。『内経』に「急激な強直は、すべて風に属する」とあるように、瘧病もまた風強病である。それゆえ筋脈の強直や、口噤反張のような症状が見られるのである。さらに風はまた陽邪であって、その性質は上行性で動きやすいので、頭熱足寒、顔面発赤、頭部動揺などの症状が現われるのである。

瘧病の治療では、例えば原文7条の証象が見られる場合に、もし発汗の方法を用いると、汗湿と外寒とが結び合って解けなくなり、病人の表気も発汗によって益々虚してしまつて、悪寒がさらに激しい変証が出現する。同時に発汗の後で病人の脈象も変わり、沈んでねじれ曲って蛇行するような感じの脈象が出現する。

もし発汗の後で、風邪は除かれ、湿邪が下行して腹に入ると、腹部が張る変証が出現することがある。しかしこの種の変証の予後は良好である。なぜならば、風寒は外表で解かれ、湿は下行するのは正常のなりゆきであつて、そのために病は反って除かれるのである。この時の脈象は一転して浮緩となり、沈弦ではなくなる。もしもこの時に脈象が依然として変らないで、やはり伏弦の脈象が現われていたならば、これは病邪が内部に累を及ぼしていること、つまり表病が除かれなくて、裏病もまたかえって増していることを物語っている。これもまた一種の変証である。

【原文】 (二一九)

夫瘧脈、按之緊如弦、直上下行。

【訓読】

夫れ瘧の脈は、これを按ずるに緊にして弦の如く、直ちに上下行す。